

羽犬塚中道遺跡 I

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の埋蔵文化財調査

筑後市文化財調査報告書

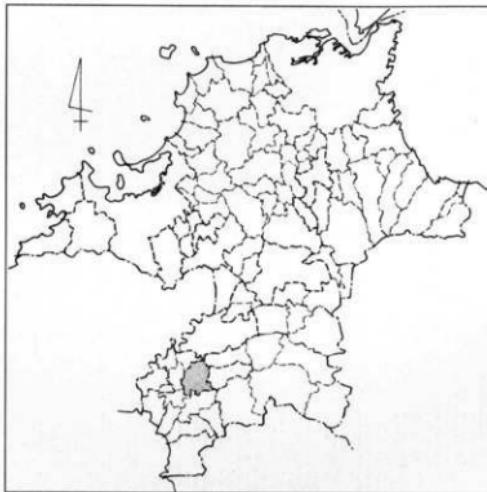
第47集

2003

筑後市教育委員会

羽犬塚中道遺跡 I

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の埋蔵文化財調査



2003

筑後市教育委員会

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稻耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

この度報告する羽犬塚中道遺跡は筑後市の中央部にあり、古代「西海道」の西側に広がる同時期の遺跡であります。特に第2次調査においては多くの墨書土器を出土し、古代「西海道」に設置されていた駅家のひとつ、「葛野駅」の位置を考える上で、多くの問題を投げ掛けています。今回報告する第3次調査では、小さな面積にも関わらず、複数の住居跡を確認し、多くの遺物を得る事が出来ました。羽犬塚周辺の遺跡群の面的・時間的な広がりを考える上で重要な資料となっております。

発掘調査から報告書作成に至るまで、羽犬塚中学校関係者をはじめ、各工事関係者、各関係機関、有識者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成15年3月

筑後市教育委員会

教育長 牟田口 和良

例　言

1. 本書は、用務員作業場の建設に伴い、筑後市教育委員会学校教育課の依頼を受けて、筑後市教育委員会社会教育課文化係が平成14年度に大字羽犬塚において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は上村英士・立石真二・奥村太郎が作成し、浄書を立石が行なった。
3. 本書使用の遺物実測図は平塚あけみ・横井理絵・佐々木寿代が作成し、浄書を立石が行なった。
4. 本書使用の写真は立石が撮影した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位はG.N.である。
6. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。
7. 本書に掲載した遺物の縮尺は金属器を1/2、その他は1/3を基本とする。また遺構については欄列をS A、住居跡をS I、柱穴をS P、カマドをS Xとし、その頭に調査次数である3をつけて記号化した。
8. 本書の執筆・編集は立石が行なった。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目　次

第1章	調査経過と組織	1
1	調査に至る経過	
2	調査組織	
3	調査経過	
第2章	位置と環境	5
1	地理的環境	
2	歴史的環境	
第3章	遺構と遺物	7
1	基本層序	
2	検出遺構	
5	出土遺物	
第4章	結語	23
付	表	24
Tab. 1	遺構一覧	
Tab. 2	出土土器一覧	
Tab. 3	出土石器一覧	
報告書抄録		26
図版		27

第1章 調査経過と組織

1. 調査に至る経過

羽犬塚中道遺跡は福岡県筑後市大字羽犬塚に所在する。ここは標高20mほどの前津丘陵の西端にあたり、古代より交通の要衝として発展を続けてきた地域である。また、今回調査対象となった箇所は、筑後市立羽犬塚中学校の敷地内に位置している。

平成14年4月19日、筑後市教育委員会学校教育課（以降「甲とする」）より用務員作業場を伴う倉庫の建設に伴い、筑後市教育委員会社会教育課文化係（以降「乙とする」）に対し、該当地区における埋蔵文化財の有無の照会がなされた。工事面積は80m²である。「乙」はこれを受け平成14年5月8日に試掘調査を行ない、対象地からは遺構が確認されなかった旨を解答した。ところが予定地が建物を建設するには不適当であったため、平成14年5月29日、当初予定地の北側に対し、再び文化財の有無の照会がなされた。「乙」は対象地に対し、平成14年6月7日に試掘を行ない、地表より0.7mのところで柱穴と思われるピット4基と土師器片を確認、この結果を「甲」に回答した。この結果を受け両者は協議を行ない、工事により遺跡が破壊される事が回避できないため、発掘調査を行なう事となった。対象面積は約100m²である。両者は中学校が夏期休業中に発掘調査を行なう事で合意した。



7 前津中ノ玉遺跡1次	44 久富斗代遺跡	76 長浜遺跡3次	169 久富郷打遺跡
10 高江遺跡	45 羽犬塚射場ノ本遺跡1次	81 羽犬塚中道遺跡2次	172 前津柳ノ内遺跡1次
11 欠塙古墳	47 若菜田中前遺跡	82 徳久中牟田遺跡	175 前津柳ノ内遺跡2次
18 前津山川遺跡	48 若菜湖ノ江遺跡	92 若葉大原遺跡2次	176 羽犬塚山ノ前遺跡
20 羽犬塚中道遺跡1次	49 若菜郷ノ本遺跡1次	101 久富大門口遺跡	177 羽犬塚射場ノ本遺跡3次
22 長崎坊田遺跡	58 長浜遺跡2次	104 前津中ノ玉遺跡2次	180 羽犬塚中道遺跡3次
26 久富市ノ玉遺跡	60 羽犬塚射場ノ本2次	135 羽犬塚寺ノ脇遺跡	181 羽犬塚原ノ野遺跡
27 若葉森坊遺跡	61 熊野屋敷遺跡1次	148 山ノ井川口遺跡	182 山ノ井南野遺跡
36 久富鳥居遺跡	63 熊野屋敷遺跡2次	164 熊野坂根遺跡	
43 長浜遺跡1次	71 若葉大原遺跡1次	167 熊野山ノ前遺跡	

Fig. 1 羽犬塚中道遺跡第3次調査区位置図 (S=1/25,000)

上記遺跡の番号は当市が採用している発掘調査番号による

2 調査組織

羽犬塚中道遺跡第3次調査に關わる調査組織は以下の通りである。

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	牟田口和良				
教育部長	下川 雅晴				
社会教育課長	松永盛四郎				
文化係長	成清 平和				
文化財専門職	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士		
文化財学芸員	柴田 眞二				
調査作業員	今山三咲子 加藤 礼子 田中ミドリ 東 末子 福田百合子	植田 勝子 川添 幸子 壇 ちゑ子 野中かさね 松尾喜代美	江崎 末廣 角 里子 鶴 カズヨ 馬場千鶴子 満川香代子	奥村 太郎 田島ヤス子 中村 富男 平尾 仁子 渡辺 泰子	加藤ちゑ子 田島 好江 中村 三男 平島 慶子
整理補助員	仲 文恵	平塚あけみ			
整理作業員	妹川 玲子 横井 理絵	佐々木寿代 福井 円	野口 晴香	野間口靖子	湯川 琴美



Fig.2 羽犬塚中道遺跡第3次調査区範囲位置図 (S=1/2,500)

3 調査経過

羽犬塚中道跡第3次調査地点の発掘調査は、当初平成14年8月1日より8月31日までの期間で行なわれる予定であったが、開始を1日早め、7月31日より作業を開始した。最初は重機による表土の除去を行ない、調査区北側では試掘時に確認していた柱穴群を、南側で方形の豊穴式住居跡群を確認した。この際、この住居跡群の広がりを確認するため、南側に調査区を拡張している。重機による作業は8月2日をもって終了し、8月5日から作業員による調査を開始した。結果、豊穴式住居4軒、カマド1基、構列2条、柱穴多数を確認した。調査は好天に恵まれたため順調に進み、8月20日までに各住居跡の床面を確認、8月22日までに作業員による調査の日程を終了し、8月27日には重機による埋め戻しを終了、全日程を終了した。

4 調査経過 抄録

7月31日	重機による表土除去開始（～8月2日まで）
8月5日	資材搬入、作業員による調査開始
8月7日	3S I 05・10、掘り下げ開始
8月8日	3S I 05、焼土面確認、3S I 15、掘り下げ開始
8月9日	3S I 05・10・15、床面までの土層断面確認、3S I 20掘り下げ開始
8月16日	3S I 05よりカマド封じと思われる白色粘土検出
8月19日	3S X 09土層断面確認、3S I 05・10・15床面確認
8月20日	3S I 05カマド土層確認、3S I 20床面確認
8月21日	3S I 05・10・15・20床面除去状況確認
8月22日	作業員による調査終了、資材搬出
8月26日	重機による埋め戻し開始
8月27日	調査終了

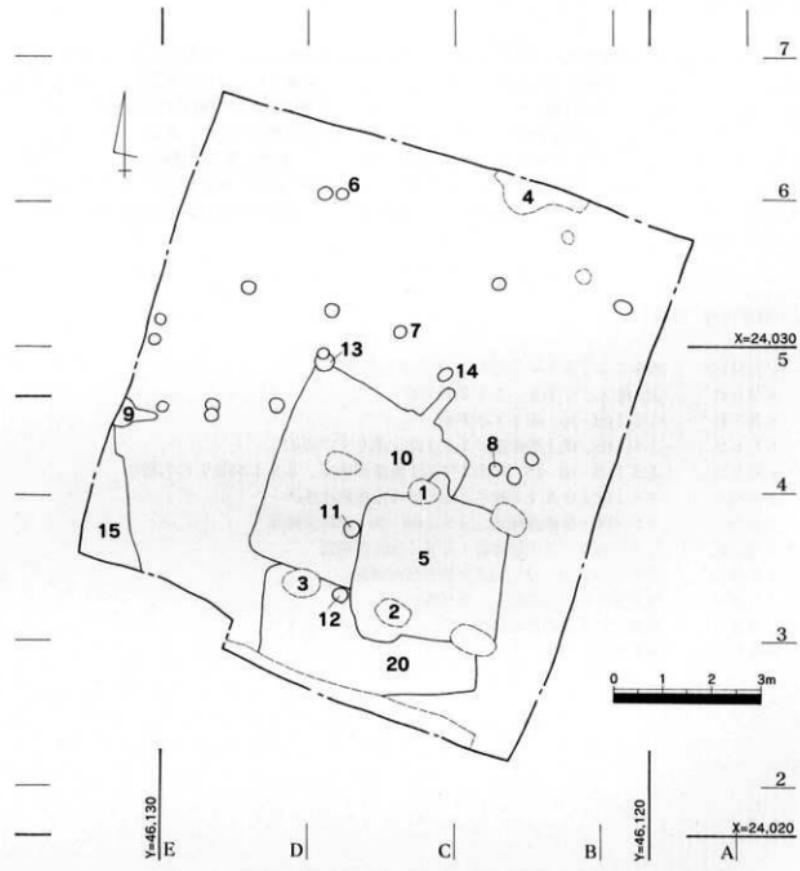


Fig.3 羽犬塚中道遺跡第3次調査区遺構配置図 (S = 1/100)

第2章 位置と環境

1 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦を中心とした田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

2 遺跡周辺の地理的環境

筑後市大字羽犬塚は筑後の中央部に位置し、JR鹿児島本線、国道209号が縦走する。南に位置する大字山ノ井、大字和泉においてこれらは国道442号と交差するが、近年では国道442号バイパスが羽犬塚を横断する形で計画されており、交通の要衝として発展を続けている。地勢的には八女丘陵より派生した標高20mほどの前津丘陵の南斜面に位置し、丘陵南側を1級河川筑後川水系の山ノ井川が西流する、地勢的には居住するための好条件に恵まれた地域である。現在ではこの丘陵の南側には筑後市街地、水田地帯が広がり、丘陵を含む北側には果樹園が経営されている。

3 歴史的環境

前述したようにこの一帯は地理的好条件に恵まれているため、古くから人々が生活をしてきた地域である。

まず先史時代の遺跡についてだが、周辺での旧石器時代の遺跡・遺物の確認報告は今の所はない。縄文時代の遺跡も未確認であるが、遺物には前津中ノ玉遺跡出土の押型文土器がある。出土したのが胴部細片であり、出土量も少ないため分類などはなされていない。また、同時にいくつかの落とし穴も確認されているが、報告者は時期不明の遺構として報告している。前津丘陵ではこの他に前津脛野谷遺跡で縄文遺物が採集されており、今後この時期の資料が増加していく事が想像される。弥生時代の遺跡・遺物も未確認であるが、羽犬塚射場ノ本遺跡において周溝状遺構が1基確認されている。周溝状遺構はこの地域では弥生時代の集落遺跡において確認される事が多く、おそらくこれも弥生時代のものであろう。今回の調査地の南側にあたる六所宮周辺では弥生時代の磨製石斧が採集されたと云う話があり、南西に位置する山ノ井川口遺跡では弥生時代の溝状遺構が確認されている。縄文時代遺跡同様、今後弥生時代の遺跡が確認される可能性を残している。古墳時代の明確な遺跡・遺物も周辺では確認されていない。

古代に入ると周辺地域の遺跡の数は急激な増加を示す。まず律令国家の成立に伴い九州には官道「西海道」が整備され、筑後国内には「御井駅」「葛野駅」「狩野駅」が設けられた。これらは日野尚志、木下良、松村一良らにより歴史地理的な観点から復元がなされている。各氏とも筑後市内をほぼ一直線に縦断する形で古代西海道を復元し、筑後市内に「葛野駅」を比定している。近年では、この復元ライン上で古代「西海道」跡が確認され、周辺では山ノ井川口遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡の発掘調査がある。また「葛野駅」を地名考証から羽犬塚周辺に比定する考えも出されているが、羽犬塚射場ノ本遺跡、羽犬塚中道遺跡では多くの墨書き土器、へら書きの文字を有する須恵器などが出土している。その内の羽犬塚

中道遺跡第2次調査によって出土したものの中に、「郡符葛（野）」と読む事のできる墨書き器が1点出土している。しかしながら、市内では古代「西海道」の東側は上妻郡として問題はないが西側の郡境は不明確な部分が多く、「葛野駅」が上妻郡に属している以上、古代西海道の西側にあたるこれらの遺跡が「葛野駅」に成り得る事はあり得ないと云う意見も出ている。古代「西海道」、「葛野駅」関連以外の遺跡としては前津中ノ玉遺跡（8 ct）があり、多くの掘立柱建物や堅穴式住居を確認している。また、羽犬塚中道遺跡（8～9 ct）や羽犬塚射場ノ本遺跡（7後～8 ct）からも堅穴式住居や掘立柱建物が確認されている。また、集落遺跡として古くから知られている前津遺跡は近年の分布調査の結果、東側（現在の前津集落の西側あたり）に拡大する事が確認されている。

中世この地域は広川荘に属し、那智熊野神社の支配下にあった。広川荘と筑後市南部に広がっていた水田荘との間にはこの間に境界争いが起きていたが、この周辺にその事を伝えるような史跡は存在しない。室町時代の争乱期には筑後国は各勢力の衝突する地域であったが、この地域の状況を伝える資料もあまり残っていない。羽犬塚の六所宮には正平12年（南朝方の年号、1357）の銘をもつ男女双対の恵比須像がある。これは記年銘を持つものとしては最古の物である。戦国期になると羽犬塚の地名を文書中に見る事ができ、当初は「はいんつか」「灰塚」と記されている。この頃の羽犬塚は宿場として機能していた事が同じ古文書から知られる所である。

近世に入り、久留米藩（馬氏）の支配に入ると羽犬塚は宿場町として整備される。その後、現羽犬塚小学校地には「御茶屋」（羽犬塚寺ノ脇遺跡）が作られ、参勤交代や藩主巡覧の際の逗留に利用された。羽犬塚宿を縱断する街道は薩摩藩主が参勤交代の際に利用していた事から通称「薩摩街道（坊津街道とも）」と称され、現在の国道209号の原形となっている。

【参考文献】

副島邦弘・福川添昭人	「九州概観自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ」「前津中の玉遺跡」	福岡県教育委員会 筑後市教育委員会	1970 1987
筑後市教育委員会・編	「羽犬塚射場ノ本」	筑後市教育委員会	1995
筑後市史編さん委員会・監	「筑後市史」	筑後市史編さん委員会	1998
上村英士	「前津中ノ玉遺跡 Ⅱ」	筑後市教育委員会	1999
立石真二	「羽犬塚寺ノ脇遺跡」	筑後市教育委員会	2000
永見秀穂	「筑後市文化財分布地図」	筑後市教育委員会	2002
小林勇作	「筑後市内遺跡群 Ⅳ」	筑後市教育委員会	2002
小林勇作	「筑後市内における西海道開港遺跡の概要」	第5回西海道古代官衙研究会発表資料	2002
上村英士	「羽犬塚山ノ前遺跡 現場説明資料」	第5回西海道古代官衙研究会発表資料	2002

第3章 遺構と遺物

1. 基本層序 (Fig.4, Pl. 1 - 4)

調査区は標高20mほどの前津丘陵上に位置する。ここは昭和17年福岡県立青年学校教員養成所（昭和19年に福岡青年師範学校に改称）が設けられ、昭和22年の新制中学校の設置に伴い羽犬塚中学校の用地となった。今回の調査区には以前校舎が建てられていたが、いつ頃取り壊されたかは不明である。

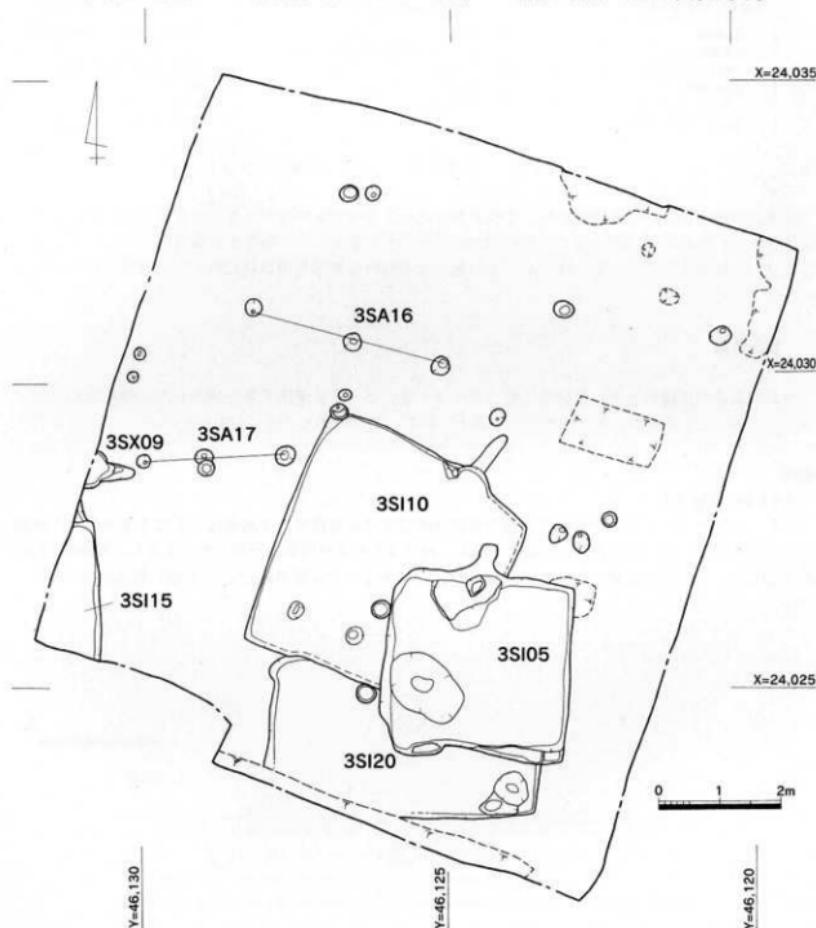


Fig. 4 羽犬塚中道遺跡第3次調査区全体図 (S=1/80)

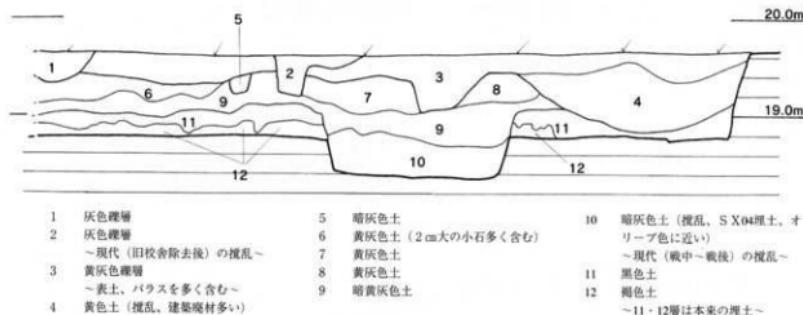


Fig. 5 基本層序 ($S = 1/50$)

調査区の表土にはパラスが數かれ、その下からはレンガやコンクリートを主とする多くの建築廃材が確認された。廃材の下は黒色土で、標高18.9mで褐色土となる。この褐色土が遺構面となる。旧校舎の基礎は、この面をわずかに掘り抜くが、その他には南側の合併浄化槽以外に目立った搅乱は認められなかった。

2. 検出遺構

今回の調査では横列2条、住居跡4軒、カマド1基、ピット状遺構多数を検出した。検出されたピットには、横列となるもの以外には規則性が認められず、建物の復元には至らなかった。

横列

3 SA 16 (Fig. 6)

C 5～D 5グリッドにかけて検出された東西方向に伸びる遺構で、今調査区からは3基の柱穴を確認した。調査区の西側に延長される可能性を残す。柱穴はそれぞれ円形の平面プランを有し、直径約0.3m、深さ約0.4m。柱穴間の距離はP 1～P 2間で約1.7m、P 2～P 3間で約1.5m。主軸の傾きはN-74°

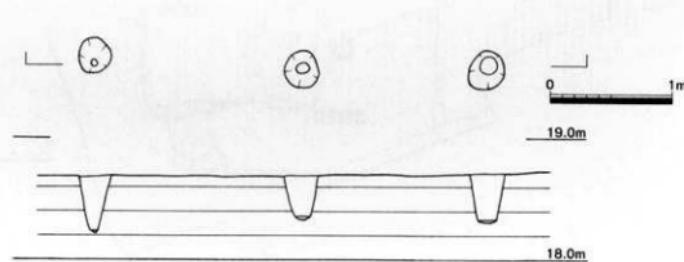


Fig. 6 3 SA 16 ($S=1/40$)

—Wを測る。遺物はP 3より土師器の小片を出土しているが、固化しうる物ではない。

3 S A 1 7 (Fig. 7)

D 4 グリットから検出された東西方向に伸びる遺構で、今調査区からは3基の柱穴を確認した。調査区の西側へ延長される可能性を残す。柱穴はそれぞれ円形の平面プランを有し、直径約0.2~0.3m、深さはP 2は不明だが他は約0.3m、柱穴間の距離はP 1-P 2間で約1.0m、P 2-

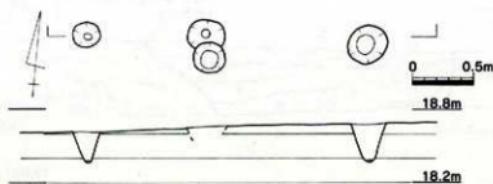


Fig. 7 3 S A 1 7 (S=1/40)

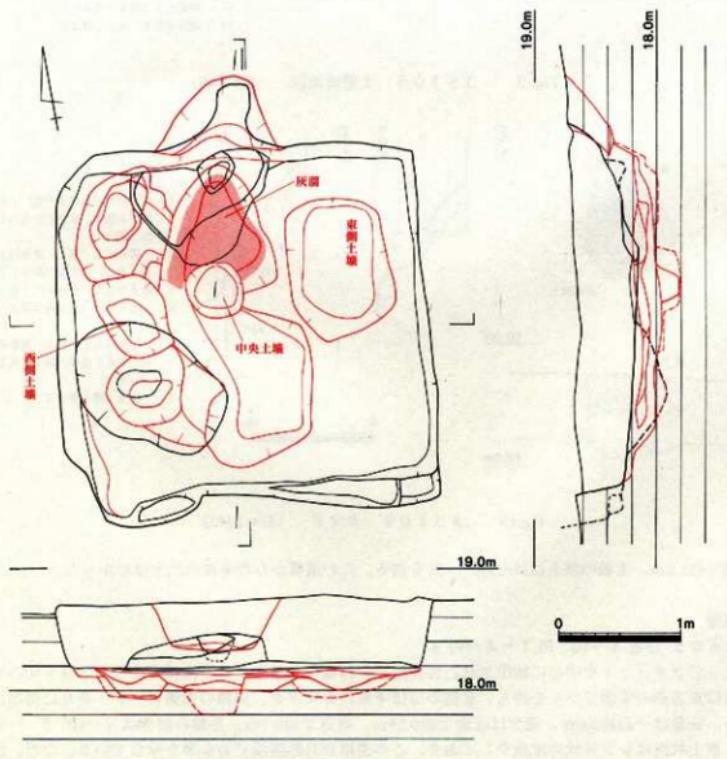


Fig. 8 3 S I 0 5 (S=1/40)

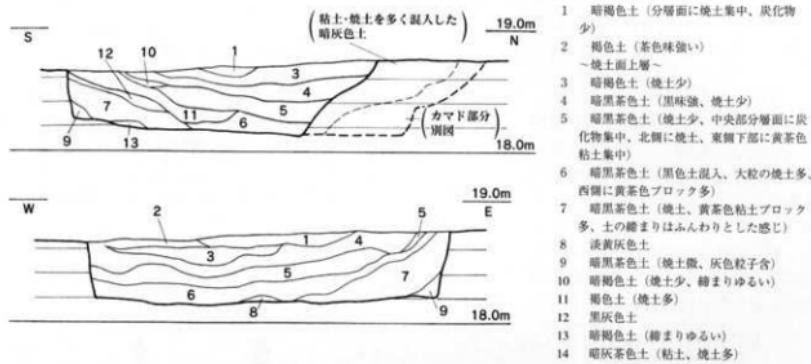


Fig. 9 3 S I 0 5 土層断面図 (S=1/40)

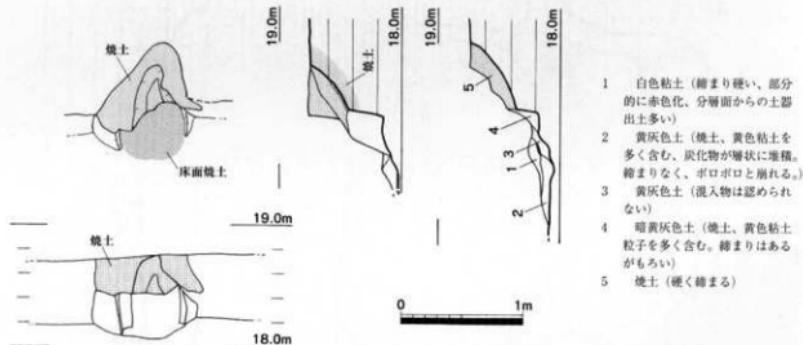


Fig. 10 3 S I 0 5 カマド (S=1/40)

P 3 間で約1.3m。主軸の傾きはN-86°—Eを測る。この遺構からの遺物の出土はなかった。

豊穴住居

3 S I 0 5 (Fig. 8~10, Pl. 1-4 ~ Pl. 2)

B 3 ~ C 3 グリットを中心検出された住居跡で、西側の 3 S I 1 0 、南側の 3 S I 2 0 を切っている。ほぼ正方形の平面プランを持ち、北側のはば中央にカマドを、南側の西側コーナー寄りに突出部を有する。法量は一辺約5.0m、深さは床面で約0.55m、堀方で約0.7m。主軸の傾きはN-10°5'—Eを測る。埋土状況はレンズ状の堆積をしており、この遺構が自然埋没である事を示している。ただ、検出面より0.1mほど下がった中央部分で焼土面が確認された。床面はほぼ平坦であるが、南西部分には硬化面が確認できなかった。

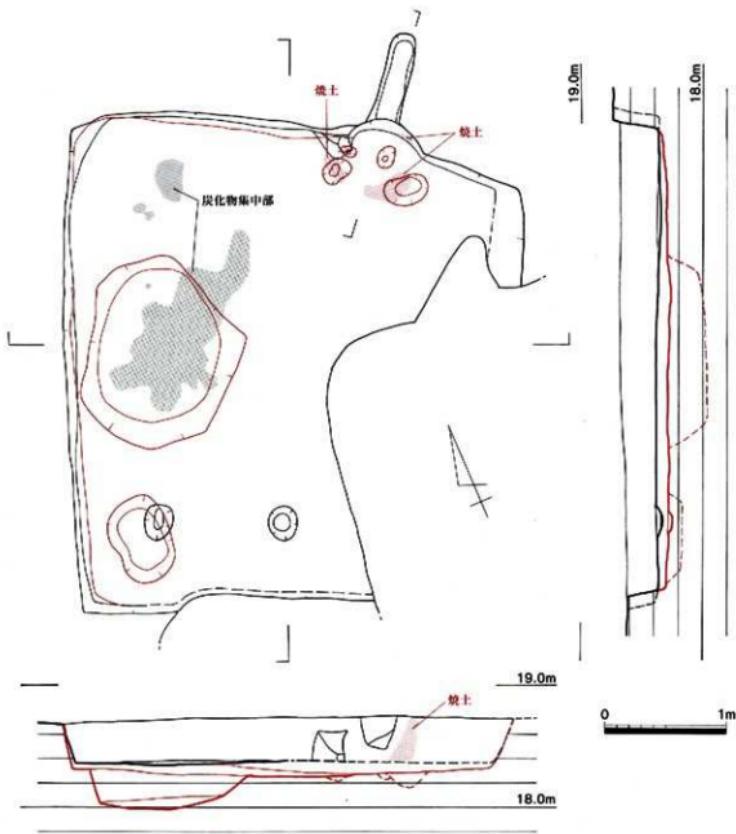


Fig.11 3 S I 1 0 (S=1/40)

南側の突出部からは床面より約0.1mほど高い部分で硬化面を確認した。これは南側で切っている3S I 2 0の床面よりも高く、この部分が昇降口として機能していた可能性がある。ただ、この正面からは床面となる硬化面が確認出来ず、床面から掘り込まれた土壤が大きい事から昇降口として強く言えない要因となっている。

北側のカマドは煙道のみが住居の外側へと伸びるタイプで、精良な白色粘土で室内に本体が作られていた。この白色粘土には、他の住居跡から確認されたカマドと思われる焼粘土塊と異なり、芯となるような木材の痕跡は認められなかった。調査の時点では、この白色粘土をカマド封じの際の祭祀に関するものと誤認して掘り下げてしまい、カマドの袖部分などを破壊してしまった。カマド部分では白色粘土の下から焼土および炭化物を多く含む黄灰色土が確認されている。これは床面除去時に灰溜まりとして

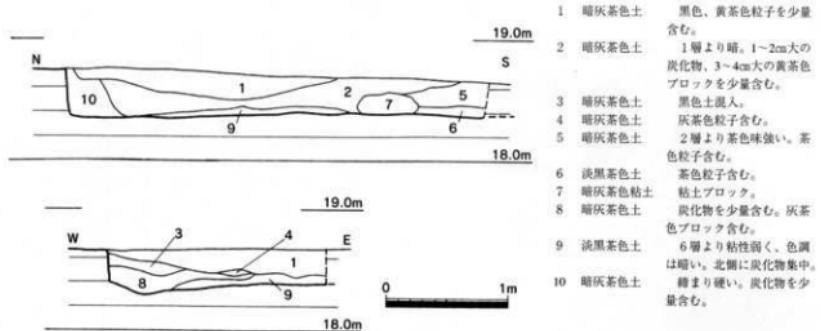


Fig.12 3 S I 10 土層断面図 (S=1/40)

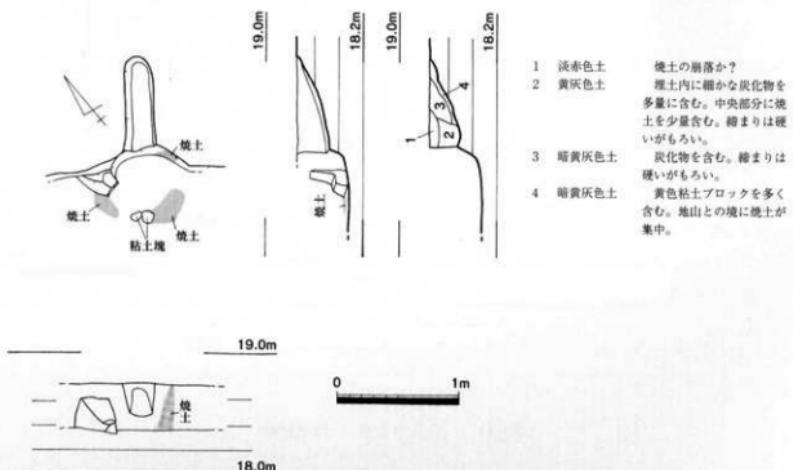


Fig.13 3 S I 10 カマド (S=1/40)

も確認されている。煙道部分は0.1~0.2mの厚さで焼土が硬く堆積し、中央のくぼみの部分には縮まりのゆるい炭化物混じりの焼土が堆積していた。現時点ではこのくぼみを煙道、厚い焼土を煙道を構成している埋土と考えているが、煙道直上には旧校舎の基礎が位置しており、焼土の硬さが遺構の構造に伴うものかは否定的な意見も出ている。

床下土壤は西側に2、中央部に1、東側に1基が確認された。中央部北側の凹みからは先ほどの黄灰色土を確認しており、灰溜まりとして認識している。

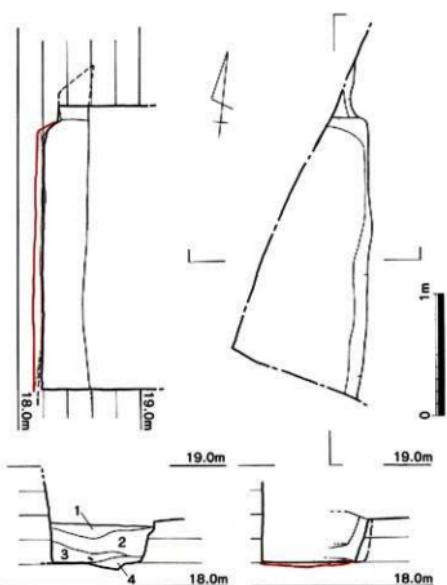


Fig.14 3 S I 1 5 (S=1/40)

へ張り出し、煙道が長く伸びるタイプである。カマドの本体は左の袖部以外はほとんど残ってなかつたが、住居床面や壁面にはカマドに伴うと見られる焼土が残存していた。カマドは残存部位や埋土中の破片から、黄土色粘土で作られ、成形にあたっては芯が用いられている。また、カマド部分の床面を除去した折に、小ビットを4基確認している。ここからは灰溢まりらしき窪みや炭化物の集中部分は確認されなかつた。煙道部分は入り口付近に炭化物混じりの灰色土、その上部に焼土が乗り、出口部分には暗黃灰色土が堆積している。焼土は縮まりがなく、カマド廃棄の際の崩落によるものと考えている。

床下土壤は西側に2基、カマド部分より小ビット4基を確認した。

この遺構では、南西コーナー部において床面において浅い窪みを確認したが、この他には柱穴となるようなものは認められなかつた。

この遺構からは埋土中より土師器および須恵器、煙道およびカマド部分からは土師器、床下土壤からは土師器を出土している。

床面および床下からは柱穴となるようなビットは確認できなかつた。

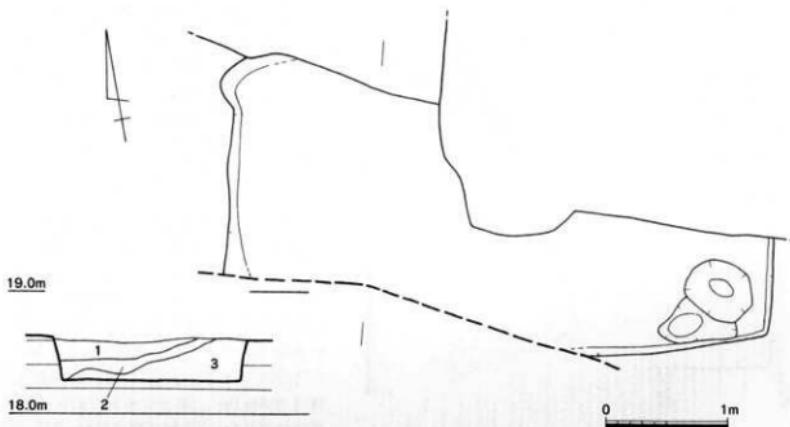
この遺構からは土師器、須恵器、鉄釘などの鉄製品、カマドおよび床下の西側中央土壤、中央土壤からは土師器を出土した。焼土面より上の層からは陶磁器が混入しているが、これは旧校舎建設の際の基礎工事に伴う混入品である。

3 S I 1 0 (Fig.11~13, PL.3)

C 4 グリットを中心検出された住居跡で、南側の3 S I 2 0 を切り、東側の3 S I 0 5 に切られている。復元で方形の平面プランを有すると考えられ、北側の東寄りにカマドを、南西コーナー部に突出部を有する。法量は東西軸約3.8m、南北軸約4.0m、深さは床面で約0.35m、堀方で約0.5m。主軸の傾きはN-23°—Eを測る。埋土状態は大きな暗黄土色粘土ブロックを多く含んでいる。床面からは炭化物が多く見つかっており、ブロック状の埋土は消火を行なうために投げ込まれたものと考えられるが、大きさはレンズ状の堆積をしている。床面はほぼ水平に仕上げられており、前述の炭化物は北西コーナー部分に集中して確認された。出土した炭化物は径が5cm前後のものが多く、住居の建築部材らしきものは認められなかつた。

南西コーナーの突出部では、3 S I 0 5 の様な硬化面は確認できず、正面部分には浅い小ビットが確認された。

北側のカマドは本体はわずかに住居外



- 1 黄灰色土 灰化物・黄色粘土塊を少し含む。締まりよく、粘性なし。下位層へ漸移的に変化。
 2 黄灰色土 黄色粘土塊を多く含む。締まりよく、粘性なし。下位層へ漸移的に変化。
 3 暗黄灰色土 締まりよく、粘性なし。

Fig.15 3 S I 2 0 (S=1/40)

3 S I 1 5 (Fig.14, Pl.4-1~3)

E 3 グリットを中心に検出された住居で、北東コーナー部分を確認したにすぎない。おそらく南側は合併浄化槽建設の際に破壊されていると考えられる。北東コーナー部分からのびる突出部には当初焼土が多く見られたため煙道の可能性があるものとして調査を進めたが、カマドの痕跡は確認できず、その性格は不明である。法量は床面までの深さ約0.2m、堀方までは約0.25mを測る。埋土は細分はしているが、ほぼ同一の土による埋没と考えられる。埋没過程は人為的なものかどうかは判断できなかった。床面はほぼ平坦に仕上げられ、堀方も同様に起伏は少ない。床下土壤は確認されなかった。

この遺構からは埋土中より土師器および須恵器を、床面硬化土中より土師器を出土している。

3 S I 2 0 (Fig.15, Pl.4-4~5)

C 2 グリットを中心に検出された住居で、北側を 3 S I 0 5・1 0 に切られ、南西コーナーを合併浄化槽により破壊されている。復元は長方形の平面プランを有すると思われ、カマドの有無は確認できなかった。法量は床面までの深さ約0.4m、堀方までは約0.5mを測る。埋没状況は南側から人為的に埋められた状況を観察される。床面はほぼ平坦に仕上げられているが、東側のピットの部分では壁に向かい約0.1mほど上がっていく。床面には南西側のピットの他に、北西コーナー部分に極めて浅い窪みが確認された。堀方は中央部が下がり、壁面に向かって競り上がる形状であるが、その差は約0.05mほどである。床下土壤は確認されなかった。

この遺構からは埋土中より土師器および須恵器を、床面硬化土中より須恵器を出土している。

カマド

3 S X 0 9 (Fig.16, Pl.4-6)

- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 黄灰色土 | 締まり緩く粘性なし。 |
| 2 黄色粘土 | 焼土、小石を含む。締まりなくボロボロ。粘性なし。 |
| 3 暗黄灰色土 | 焼土、黄色粘土を少し含む。締まりよく粘性なし。 |
| 4 焼土 | 締まりはない。 |
| 5 黄色粘土 | 締まり緩く粘性なし。 |
| 6 暗茶色土 | 締まり緩く粘性なし。 |

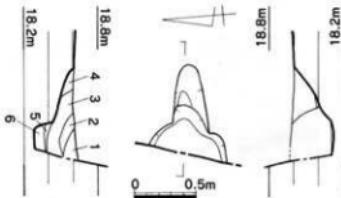


Fig.16 3 S X 0 9 (S=1/40)

E 4 グリットから検出された遺構で、住居部分は調査区外となっている。住居に伴い検出された他のカマドと異なり、本体部分が住居外へと突出するタイプのものである。内面は焼けておらず、煙道の先端部に焼土が堆積しているにすぎない。埋没状況はほぼ自然埋没である。

この遺構からは土師器を出土している。

3. 出土遺物

3 S I 0 5 出土遺物

遺物の出土層位は大きく焼土面上層、埋土、床下土壤およびカマドの3つに分類される。床面直上に置かれた状態での遺物の出土は確認されなかった。出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品がある。

1) 焼土面上層出土遺物 (Fig.17, Pl. 5-1)

須恵器

1～3は蓋である。1は端部つまみ出し、2は端部折り曲げ、3は還元不良で端部が長く立ち上がるるものである。4・5は壺である。いずれも底部ヘラ切り、高台張り付けのものである。6は椀である。火附れにより外面の大部分が剥離している。7は短頸壺の小片である。この他に壺の胴部片が出土している。外面は平行タタキ、内面には青海斑がみられる。

土師器

8～10は壺の口縁部細片である。11～13は鉢である。11は口縁部が反り返り、外面に煤の付着が見られることから、鍋の可能性も残る。12は口縁部が立ち上がるタイプのもので、内外面ともに上部は横ナデ、下半は外面工具ナデ、内面ナデで仕上げられている。13も口縁部が立ち上がるタイプのものである。14は瓶である。底面には径5mmほどの穴が現存部分で13ヶ所施されている。15・16は移動式カマドの底部と思われる細片であるが、煤や二次焼成などの痕跡は確認できない。17・18は製塙土器である。17は尖底で器壁が厚く、表面の調整は粗雑である。内面の刷毛目も遺存状態は悪い。18は尖底で口縁部が上方に開き、器壁は薄いものである。表面調整は粗いが17ほど粗雑ではない。二次焼成により赤色化した部分が見られ、さらに白色の斑点状の付着物の痕跡が見られる。

2) 埋土出土遺物 (Fig.18～19, Pl. 5-2～6)

須恵器

19・20は蓋である。いずれも端部をつまみ出すタイプのもので、19は焼成不良。21～24は壺である。23は高台張り付けで、底部に線条痕が見られるが、ヘラ記号か否かは判断できない。24は高台張り付けで焼成不良である。

土師器

25・26は蓋である。25は端部が立ち上がる。須恵器の模倣か。26は端部が直線状に延びるタイプで

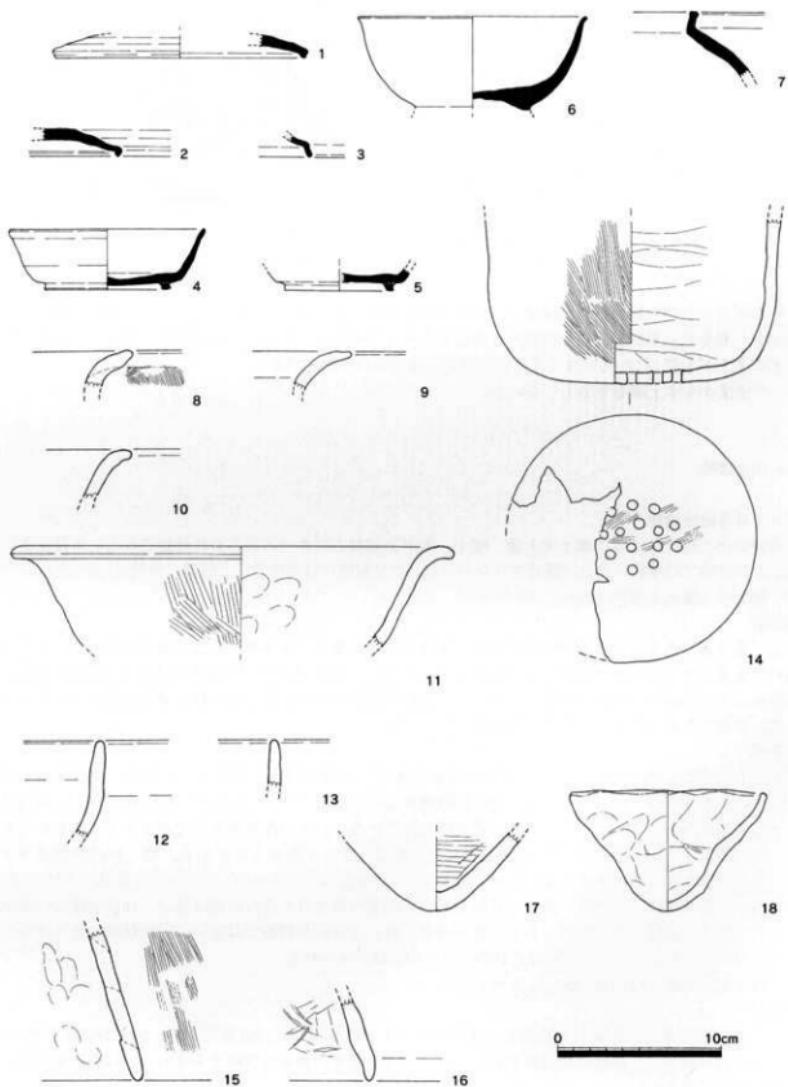


Fig.17 3 S I 0 5 烧土面上層出土遺物 (S = 1/3)

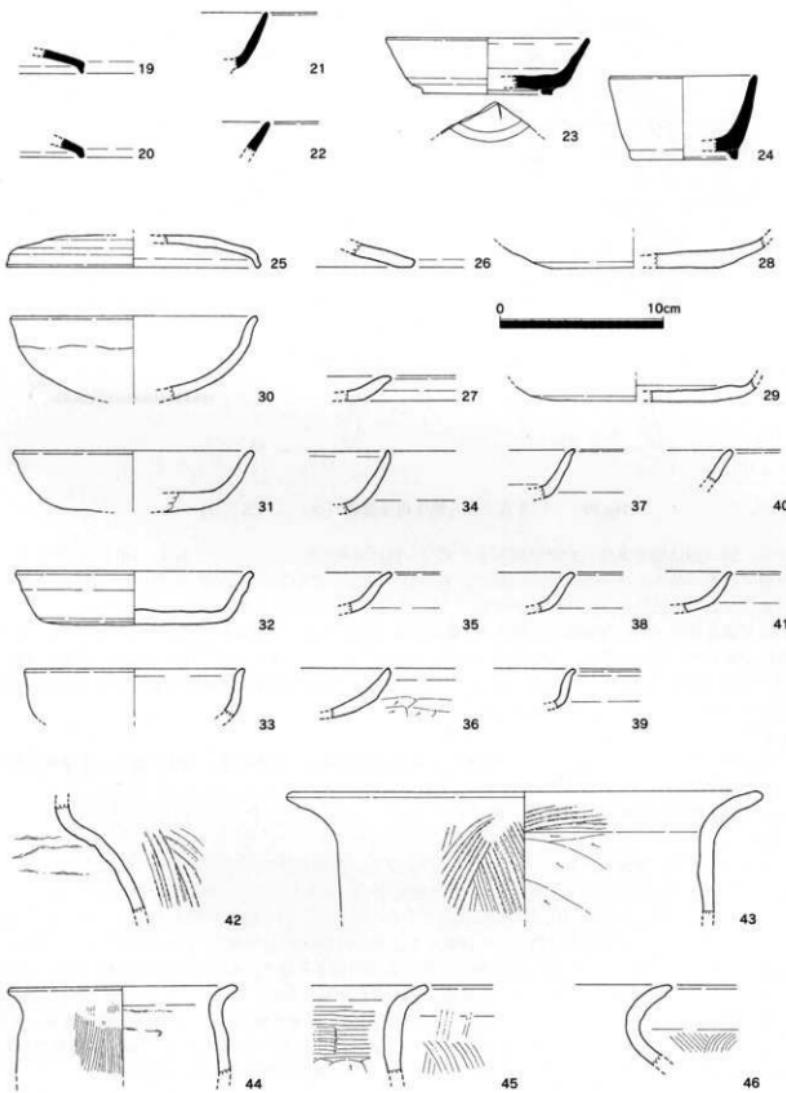


Fig.18 3 S I 0 5 埋土出土遺物 (1) (S = 1/3)

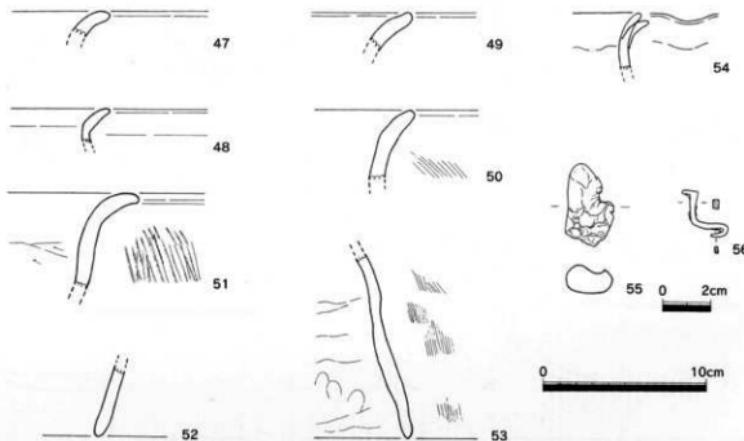


Fig.19 3 S I 0 5 埋土出土遺物 (2) (S = 1/3 · 1/2)

ある。27~29は皿である。27は底部ヘラケズリ、28は底部回転ヘラケズリである。30は丸底坏である。外面下方を手持ちヘラケズリで仕上げている。31~41は坏である。42は壺の肩部小片である。43~50は甕である。ただし46は反り返りが大きく、壺となるかもしれない。51は鉢もしくは鍋である。口縁部の反り返るタイプで、内外面には部分的に煤の付着が見られる。52は瓶か。53はカマドの根と思われる破片であるが、煤の付着や二次焼成による赤色化は見られない。54は片口の破片である。外面は剥離がひどいが、内面には煤などの付着が見られる。55は不明土製品である。外面は丁寧に仕上げられており橙色をしている。化粧土を施したものか。

鉄製品

56は釘である。頭の部分がJ字状に潰れた、断面方形のものと思われる。全体に短く、S字状に曲がっている。

3) 床下土壤およびカマド (Fig.20, Pl. 7)

土師器

57は坏である。底面を手持ちヘラケズリで仕上げる。西側土壤からの出土。58~62は甕である。58は器形の変型が大きい。カマド周辺および白色粘土下からの出土。59は東側土壤からの出土。60·61はカマド部分白色粘土下からの出土。62は灰溜まりからの出土。63~65は鉢である。63·64は同一遺物の可能性があるがここでは別遺物として掲載する。共に口縁部が反り返り、端部を摘まみ上げている。63には煤の付着が多く見られる。63は中央土壤および灰溜まり出土。64は東側土壤出土。65は口縁が立ち上がるタイプの物で、内面には二次焼成に伴う変色が見られる。灰溜まり出土。66は片口である。形成は雑で、内外面ともに二次焼成による変色が見られる。中央土壤出土。67は製塙土器である。形状および色調・白色の斑点など、焼土面上層出土の18と酷似している。西側土壤出土。68は紡錘車である。断面型は台形状となり、焼成前穿孔が施されている。カマド部分白色粘土下からの出土。

3 S I 1 0 出土遺物 (Fig.21, Pl. 8)

3 S I 1 0 の出土遺物は埋土、カマド、煙道部に3分される。ただし、煙道部の遺物は土師器片であ

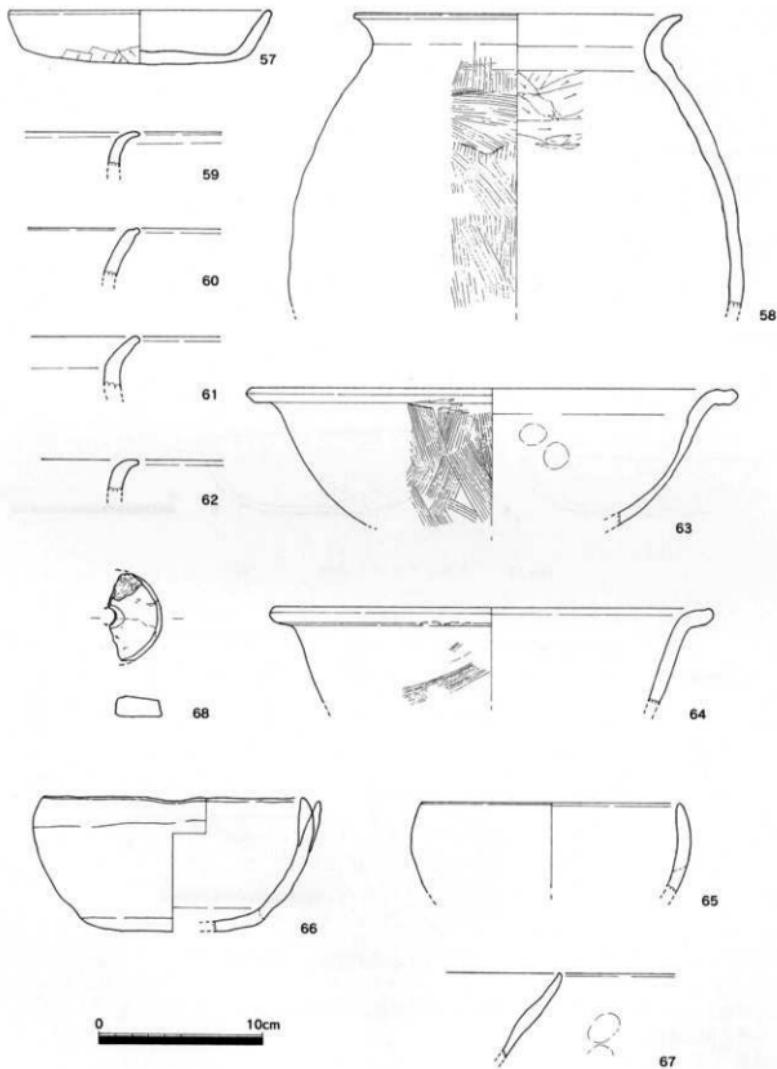


Fig.20 3 S I 0 5 床下土壤およびカマド出土遺物 (S = 1/3)

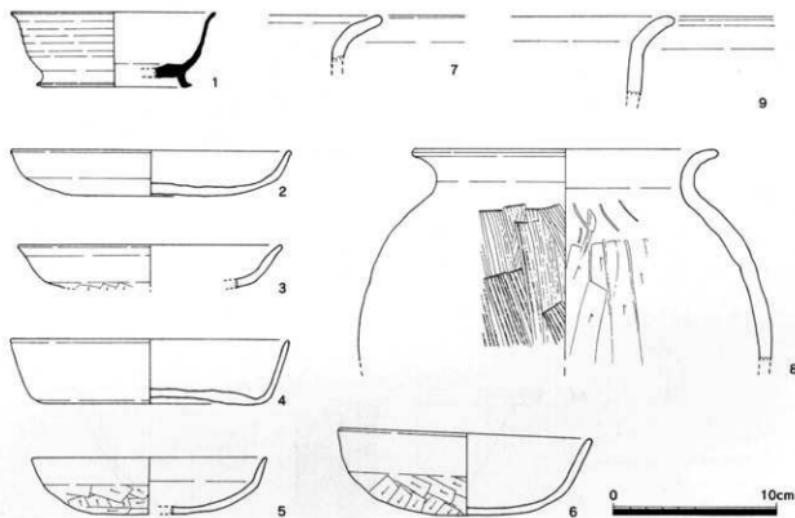


Fig.21 3 S I 1 0 出土遺物 (S = 1/3)

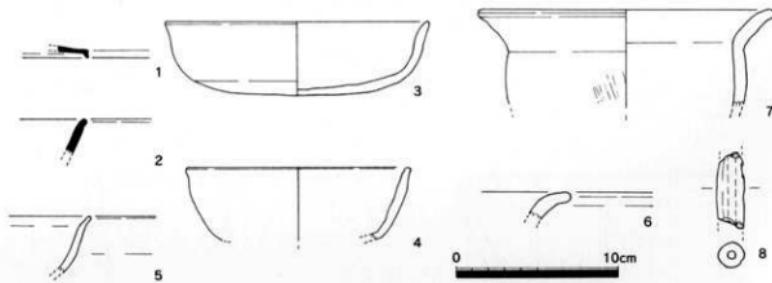


Fig.22 3 S I 1 5 出土遺物 (S = 1/3)

り、図化しえないのである。出土遺物には須恵器、土師器がある。

1) 埋土出土遺物

須恵器

1は壺である。色調は赤味がかったおり、口縁部は弱く外反する。張り付け高台は端部外側が摘み出されている。この他には壺の胴部片が数点出土している。いずれも外面格子タタキ、内面青海斑が見られる。

土師器

2・3は皿である。ともに外底面を手持ちヘラケズリで仕上げる。3は外面に煤の付着が多い。4～6は壺である。4は外底面を回転ヘラ切り後工具ナデで仕上げる。5は外底面手持ちヘラケズリ。内面はナデであるが、紐状の痕跡が1条見られる。6は外底面を手持ちヘラケズリで仕上げる。7・8は壺である。8は内外面ともに煤の付着が少ない。

2) カマド出土遺物

9は壺の口縁部細片である。内外面ともに二次焼成により黒ずんでいる。

3 S I 1 5 出土遺物 (Fig.22, Pl. 9-1)

S I 1 5からの遺物は全て埋土からの出土である。出土遺物には須恵器、土師器がある。

須恵器

1は蓋の小片である。端部を摘み出している。色調は黄灰色に近い。2は壺の口縁部小片である。外側調整は粗雑で、色調は部分的に赤味を帯びている。この他に壺の胴部片がある。外面は平行タタキ、内面は青海斑が見られる。

土師器

3～5は壺である。いずれも磨耗が激しいが、4・5は口縁内面に小さな段が確認できる。6は壺の口縁部細片である。7は鉢である。内外面ともに摩滅が激しい。8は土錘である。両端部を欠損している。

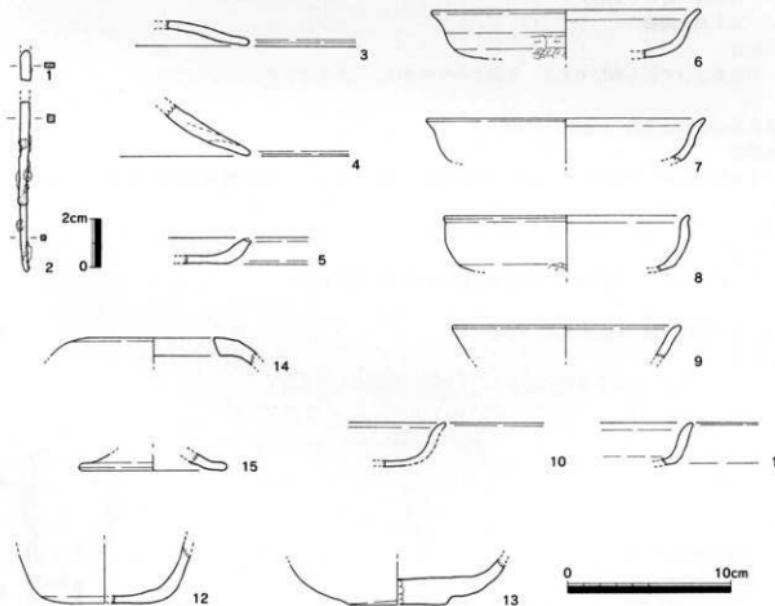


Fig.23 3 S I 2 0 出土遺物 (S=1/2・1/3)

3 S I 2 0 出土遺物 (Fig.23, PL. 9-1)

S I 2 0 からの遺物は検出面、埋土、床下に分けられる。この遺構からは鉄製品、須恵器、土師器を出土している。

1) 検出面出土遺物

鉄製品

出土後に一度崩れてしまい、一部を欠損している。2は断面方形であるが、中央部分で段を有している。頭と思われる方は欠損している。1は断面は長方形で、先端部に近付くにつれて平らに潰れていく。先端部の平面形状は三角形状に尖っている。この両者は元来は一つのものであったが、一部を失っており、原形がどのようなものであったかは不明である。

土師器

皿と思われる破片が出土しているが、図化しうるものではない。

2) 埋土出土遺物

須恵器

須恵器はいずれも細片である。色調は内外面青灰色、断面は赤紫色が見られる。

土師器

3・4は蓋である。共に端部が若干反り返るが、4は成形が悪く粘土紐の単位が外面から確認できる。5~11は壺の口縁部片である。大半が口縁部が外反する。12・13は壺の底部片と思われる破片である。12は内外面に煤の付着が見られ、外面にはさらに赤色顔料の痕跡が見られる。13は底部糸切り痕跡が見られる。14は無頸壺と思われる口縁部破片であるが、全面に煤の付着が見られ、カマドになるかも知れない。15は脚の破片である。

3) 床下出土遺物

須恵器

須恵器はいずれも細片である。色調は内外面青灰色、断面は赤紫色が見られる。

3 S X 0 9 出土遺物 (Fig.24-1~2)

土師器

1は壺である。外底面のヘラ切り痕跡の調整は粗雑である。2は壺の口縁部片である。

3 S P 1 2 出土遺物 (Fig.24-3, Pl. 9-2)

土師器

3は壺である。口縁部外反、外底面に板圧痕が多く見られる。

出土地点不明遺物 (Fig.24-4, Pl. 9-2)

鉄製品

4は釘である。頭はL字状に曲がり、先端部は欠損している。

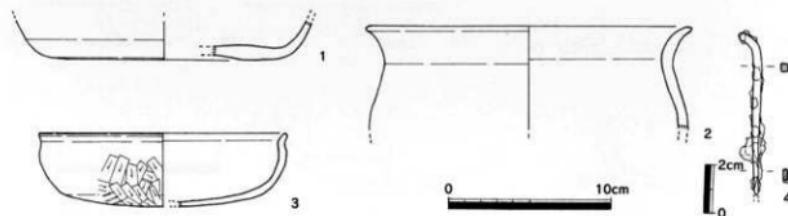


Fig.24 その他の出土遺物 (S = 1/3 · 1/2)

第4章 結語

羽犬塚中道遺跡は、筑後市内を縦断する古代西海道とからめて報告される事が多いが、今回の報告書が最初の正式報告となる。今回報告される3次調査区は面積も小さく、竪穴式住居を4軒確認したにすぎない。ここでは1次調査区に見られる主軸を同じくしうる柵列群、2次調査で確認された掘立柱建物群や墨書き土器などは確認されなかった。

竪穴式住居はカマドを確認したものは4軒中2軒である。これらは1・2次調査区に多く見られたカマドの主体部が大きく住居外へ飛び出すタイプの物ではなく、カマドは僅かに住居外へ張り出すタイプの物である。カマドの張り出しの大きなものが時期的に新しいとすれば、これらは他の調査区のものよりも時期が古い住居という事になる。

遺構内の出土遺物は主に8世紀前半から中頃にかけてのもので中頃のものが多く、前津中ノ玉遺跡2次調査の住居跡群と同時期に当たる。ただし、その根拠は3S105床下土壌出土の手持ちヘラケズリの土師器壺(Fig.19-57)であり、その他の手持ちヘラケズリの土師器壺および須恵器壺はすべて住居内埋土からの出土であるため、時期の決定には注意が必要である。羽犬塚中道遺跡1・2次調査での出土遺物が8～9世紀作とされているが、整理作業中であるため遺構と遺物の関係など、詳細は不明である(近年中に刊行される予定である)。また、最も近い位置で古代西海道が確認された羽犬塚山ノ前遺跡の住居跡出土遺物とも若干の時期差が認められるところである。

古代西海道跡とともにからめた遺構の時期差による性格の異差などは、3次調査区のみでの検証は不可能であり、1・2次調査区の報告を待たねばならない。今回の調査の成果は、羽犬塚中道遺跡の開始時期が從来より1時期ほど古く捕らえられる可能性が出てきたという所であろうか。

【注】

羽犬塚中道遺跡に関する記述は、小林勇作(筑後市教育委員会)「筑後市内における西海道間連遺跡の概要」を元にした。

【参考文献】

上 村 英 士	「前津中ノ玉遺跡Ⅱ」	1999	筑後市教育委員会
小 林 勇 作	「筑後市内における西海道間連遺跡の概要」	2002	第5回西海道古代官街研究会資料

Tab.1 遺構一覧

Fig. 台形番号	遺構番号	アリット	北緯 (度)	東経 (度)	深度 (m)	土種	平面形状	断面形状	出土遺物	判断	備考
4	1 3SX01	C 4					楕円形	凸出部	陶器	丸瓦	日焼合掌造
4	2 3SX02	C 3					楕円形	凸出部	土器破片	丸瓦	日焼合掌造
4	3 3SX03	D 3					楕円形	凸出部	土器破片	丸瓦	日焼合掌造
4	4 3SX04	B 6					不定形	造形なし	土器破・陶器・瓦類	丸瓦	丸瓦
8	5 3S105	C 3	3.0	3.0	0.55(D.7)	N=10.5° E	方形 (橢円断面)	直方形	土器破・土器碎・金銀器	丸瓦	3.5 11.0~、3.5 12.0~、北朝カマド有
4	6 3SP05	C 6					円形				
6	7 3SA10 (P3)	C 5					円形		土器破		3.5 A10 (陶)
4	8 3SP06	B 4					円形		土器破・土器碎		
16	9 3SX09 (WPP)	E 4					楕円形		土器破	丸瓦	ガラス片有
11	10 3S110	C 4	4.0	3.0	0.35 (D.4)	N=23° E	變形方形	直方形	土器破・土器碎・瓦類	丸瓦	3.5 11.0~、3.5 10.5~、北朝カマド有
11	11 3SP11	C 3					円形		土器破		3.5 11.0~
4	12 3SP12	C 3					円形		土器破		3.5 11.0~
4	13 3SP13	C 4					円形		土器破		3.5 11.0~
4	14 3SP14	C 4					円形		土器破		
14	15 3S115	E 3	---	---	0.3 (D.25)	---	(直方)	(直方)	土器破・土器碎・瓦類	丸瓦	北朝カマド?
6	16 3SA16	C5=D5 3.2					N=74° -W				被覆
7	17 3SA17	D 4	2.3				N=86° -E				被覆
18											文書
19											文書
20	20 3S120	C 2	---	---	---	0.4 (D.5)	楕円形	直方形	土器破・土器碎・金銀器	合瓦	3.5 11.0~、3.5 10.5
21											文書
22											文書
23											文書
24											文書
25	25 3S116	E 3							土器破・土器碎	合瓦	被覆L5、3.5 11.5~(鉢)

Tab.2 出土土器一覧

Fig. No.	遺構	復原	断面	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	残分	色調 (N.R.T)	施工	施用	参考 (時期)
17	1 3S105土器1	直筒	直筒	11.0		高さ2.0	0.3	底付	淡青灰色	直切	直切	
17	2 3S105土器2	直筒	直筒	11.0		高さ2.0	0.3	底付	青灰色	直切	直切	
17	3 3S105土器3	直筒	直筒	11.0		高さ2.0	0.3	底付	青灰色	直切	直切	
4	4 3S105土器4	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	織物痕少	浅打	青白村
5	5 3S105土器5	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	青白村
6	6 3S105土器6	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	織物痕少	平打	青白村? 外面により笠外輪山ほとんど無
7	7 3S105土器7	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
8	8 3S105土器8	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	織物痕少	浅打	3.5 11.0~
9	9 3S105土器9	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
10	10 3S105土器10	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
11	11 3S105土器11	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
12	12 3S105土器12	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
13	13 3S105土器13	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
17	14 3S105土器14	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
17	15 3S105土器15	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
17	16 3S105土器16	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
17	17 3S105土器17	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
17	18 3S105土器18	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
18	19 3S105土器19	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
18	20 3S105土器20	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
21	21 3S105土器21	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
22	22 3S105土器22	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
22	23 3S105土器23	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
24	24 3S105土器24	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
25	25 3S105土器25	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
27	27 3S105土器27	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
28	28 3S105土器28	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
29	29 3S105土器29	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
30	30 3S105土器30	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
31	31 3S105土器31	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
32	32 3S105土器32	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
33	33 3S105土器33	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
34	34 3S105土器34	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
35	35 3S105土器35	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
36	36 3S105土器36	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
37	37 3S105土器37	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
38	38 3S105土器38	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
39	39 3S105土器39	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
40	40 3S105土器40	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
41	41 3S105土器41	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
42	42 3S105土器42	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
43	43 3S105土器43	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
44	44 3S105土器44	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
45	45 3S105土器45	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
46	46 3S105土器46	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~
47	47 3S105土器47	直筒	直筒	11.0	7.7	3.7	1.0	底付	青灰色	直切	直切	3.5 11.0~

Fig.	No.	遺物	材質	表面	基種	寸法 (mm)	直径 (mm)	断面 (mm)	厚さ (mm)	特徴	色調 (色)	形	断面	備考 (付記)
19	48.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	L型複合の凹凸研削・云母・拘泥感有り	直筒	
19	49.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	L型複合の凹凸研削・云母・拘泥感有り	直筒	
19	50.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	L型複合の凹凸研削・云母・拘泥感有り	直筒	
19	51.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	L型複合の凹凸研削・云母・拘泥感有り	直筒	
19	52.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色	1~2の螺旋少健	直筒	内側環付
19	53.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色	1~2の螺旋少健	直筒	内側環付
19	54.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色	1~2の螺旋少健	直筒	内側環付
19	55.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色	1~2の螺旋少健	直筒	内側環付
20	57.35105Y-1	上部鉢	土	素	H	16.0	13.0	3.3		口縁部口方断面	淡青紫色/深青紫色	1~3複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	内側環付もヘタケズリ
20	58.35105T-1	上部鉢	土	素		Q(10)				口縁部口方断面	淡青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	頭上部・口部の丸み大き
20	59.35105Y	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	頭上部
20	60.35105F-1	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	頭上部
20	61.35105V-1	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	頭上部
20	62.35105T-1	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	頭上部
20	63.35105M	上部鉢	土	素		(30.0)				口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	頭上部
20	64.35105T-1	上部鉢	土	素		Q(7)				口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	頭上部・手平付・内側環付
20	65.35105M	上部鉢	土	素		(15.0)				口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	頭上部・手平付
20	66.35105F-1	上部鉢	土	素	H(15.0)	17.0(15)	8.2		1/4	600~650mm	600~650mm	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	内側環付・手平付
20	67.35105M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	内側環付・手平付
20	68.35105M	上部鉢	土	素	H	(5~6)	(4.5~1.0)	0.9(1.0)	1/2	底面部	淡青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	内側環付
21	1.35110M	底面部	片			12.5(5)	19.0(5)	4.0	1/3	底面部	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英子・柔軟感有り	直筒	3.5(1.0)~1.5~2.5手縫目片
21	2.35110M	底面部	片			11.0(7)	17.0(7)	2.8	1/4	底面部	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形手縫目片
21	3.35110M	底面部	片			(16.1)				口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形手縫目片
21	4.35110M	底面部	片			(16.0)	(13.0)	3.9	1/4	口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形手縫目片
21	5.35110M	底面部	片			14.3	6.7	3.5	1/4	底面部	淡青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形手縫目片
21	6.35110M	底面部	片			13.5	(14.0)	5.0	1/4	底面部	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形手縫目片
21	7.35110M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	馬蹄形手縫目片
21	8.35110M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	馬蹄形手縫目片
21	9.35110M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	馬蹄形手縫目片
22	1.35115M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	中半周
22	2.35115M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	中半周
22	3.35115M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	中半周
22	4.35115M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	中半周
22	5.35115M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	中半周
22	6.35115M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	中半周
22	7.35115M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	中半周
22	8.35115M	底面部	片							口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	1~2複合の凸凹研削・石英・拘泥感有り	直筒	中半周
23	9.35120M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	
23	4.35120M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	
23	5.35120M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	
23	6.35120M	上部鉢	土	素	H	(16.0)	(12.0)	3.0		口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
23	7.35120M	上部鉢	土	素	H	(17.0)	(14.4)			口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
23	8.35120M	上部鉢	土	素	H	(15.0)	(13.3)			口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
23	9.35120M	上部鉢	土	素	H	(14.0)				口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	
23	10.35120M	上部鉢	土	素	H					口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
23	11.35120M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
23	12.35120M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
23	13.35120M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
23	14.35120M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
23	15.35120M	上部鉢	土	素						口縁部断面	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	馬蹄形ヘタケズリ
24	1.35X09	上部鉢	土	素						底面部	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	先端部凹入ヘタ付
24	2.35X09	上部鉢	土	素						底面部	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	先端部凹入ヘタ付
24	3.35P12	上部鉢	土	素						底面部	淡青紫色/深青紫色	直筒・圓錐形・石英子・柔軟感有り	直筒	先端部凹入ヘタ付

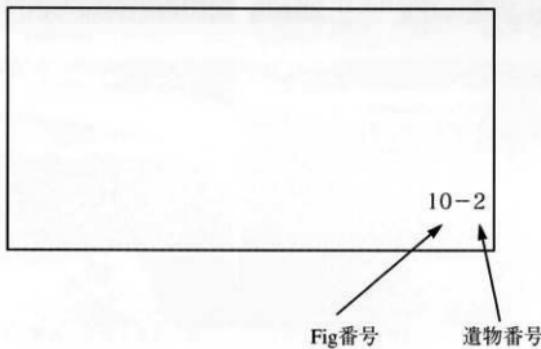
Tab.3 出土金属器一覧

Fig.	No.	遺物	材質	表面	全長 (mm)	外幅 (mm)	断面 (mm)	重量 (g)		進行筆	所持	総合
19	66.35105M	上部鉢	土	素	4.4	0.4~	0.6			完成	古井	古井洗に毫毛
23	1.35120M	上部鉢	土	素	11.0	0.5~	0.3			完成	古井	23.2(1)同一
23	10.35120M	上部鉢	土	素						完成	古井	内側に毫毛付

P L A T E

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



Pl. 1



1 羽犬塚中道遺跡第3次調査区検出状況（東から）



2 羽犬塚中道遺跡第3次調査区 全景（東から）



3 羽犬塚中道遺跡第3次調査区 全景（南から）



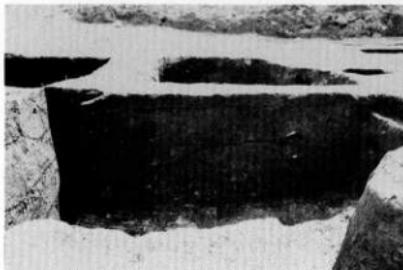
4 基本層序（南から）



5 3 S I 05 北側土層断面（西から）



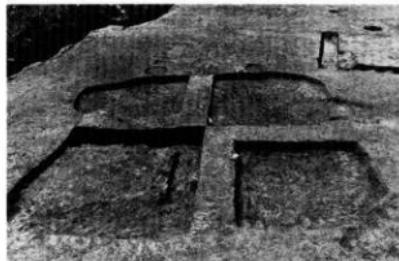
6 3 S I 05 南側土層断面（東から）



7 3 S I 05 西側土層断面（北から）



8 3 S I 05 東側土層断面（南から）



1 3 S I 05 焼土面 (東から)



2 3 S I 05 床面 (南から)



3 3 S I 05 カマド (南から)



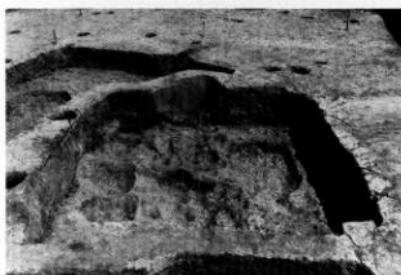
4 3 S I 05 カマド土層断面 (東から)



5 3 S I 05 カマド完掘状況 (南から)

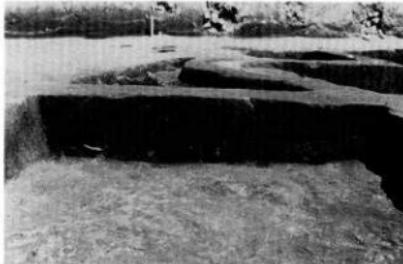


6 3 S I 05 升降口 (北から)

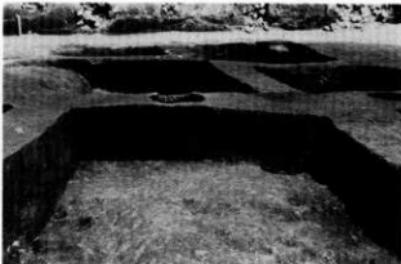


7 3 S I 05 完掘状況 (南から)

Pl. 3



1 3 S I 10 北側土層断面 (西から)



2 3 S I 10 南側土層断面 (西から)



3 3 S I 10 西側土層断面 (南から)



4 3 S I 10 床面 (南から)



5 3 S I 10 炭化物出土状況 (南から)



6 3 S I 10 カマド (南から)



7 3 S I 10 完掘状況 (南から)



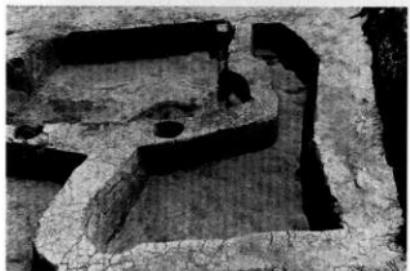
1 3 S I 15 土層断面 (北から)



2 3 S I 15 床面 (南から)



3 3 S I 15 完掘状況 (南から)



4 3 S I 20 床面 (西から)

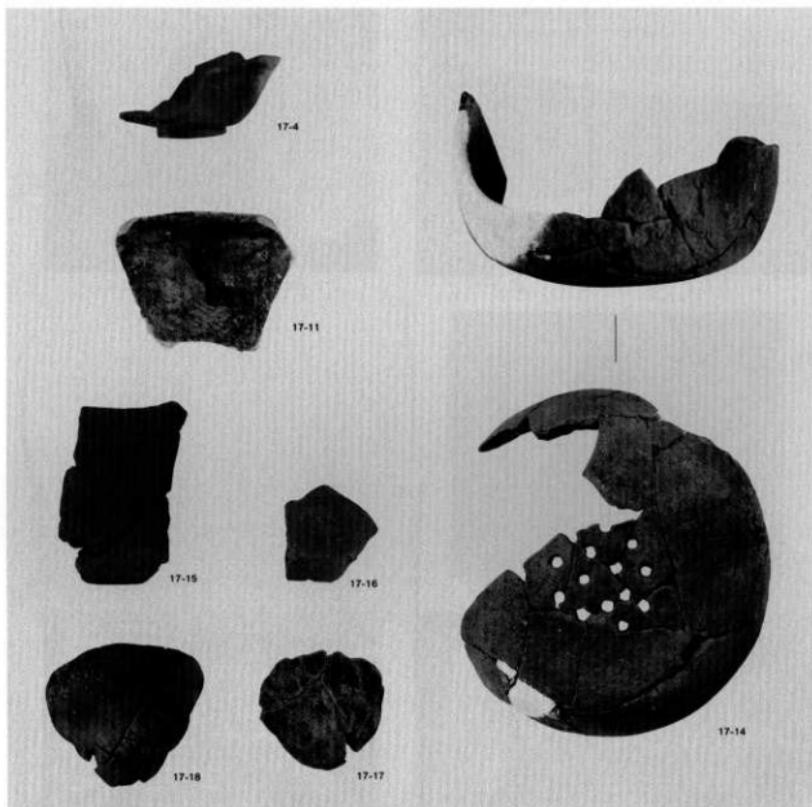


5 3 S I 20 完掘状況 (西から)

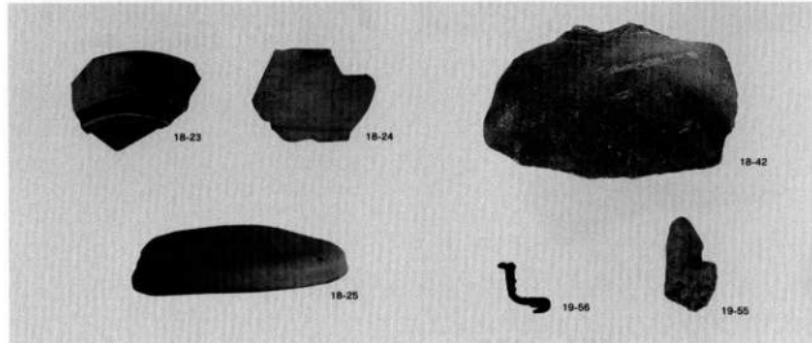


6 3 S X 09 土層断面 (北から)

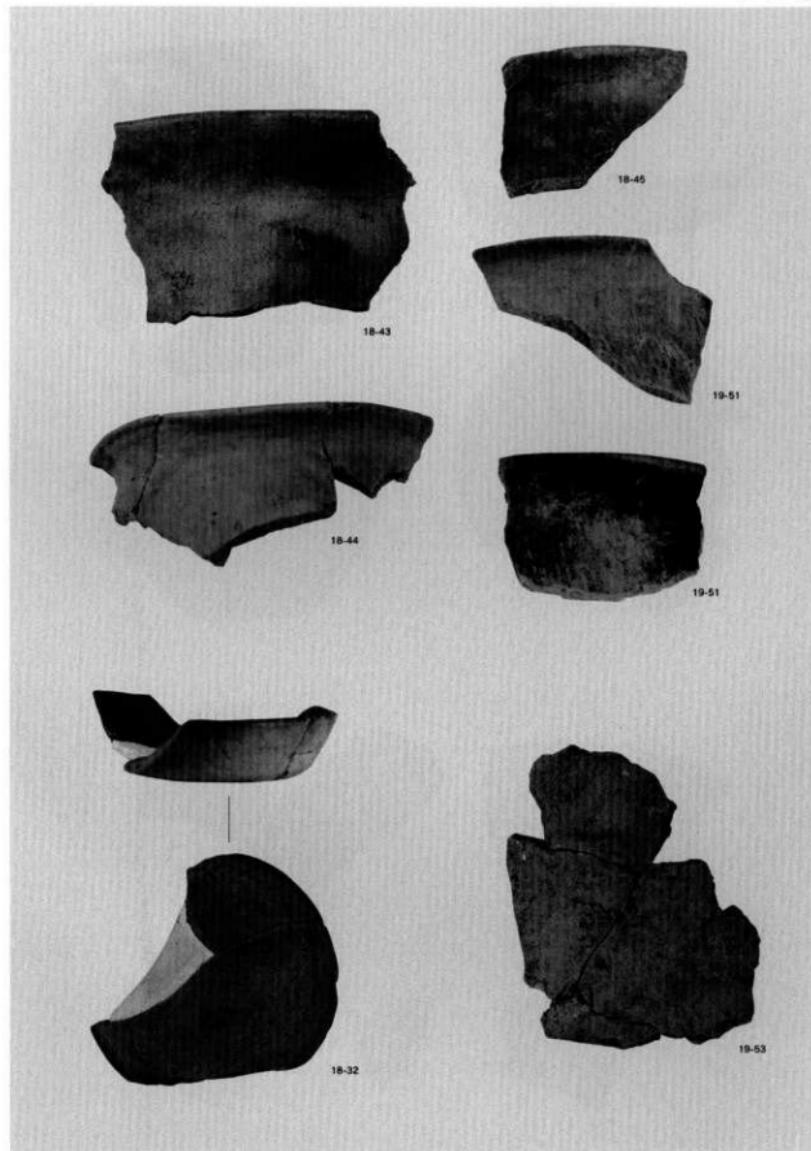
Pl.5



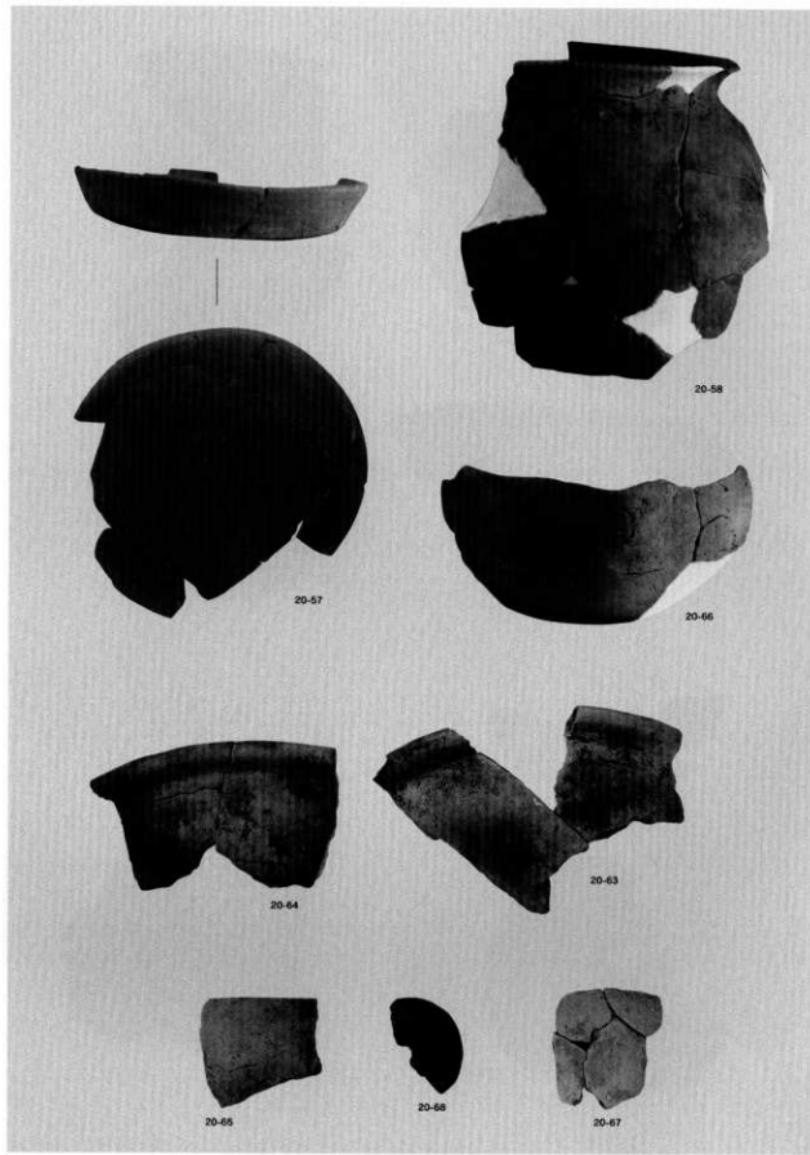
1 3 S I 05 烧土面上層 出土遺物



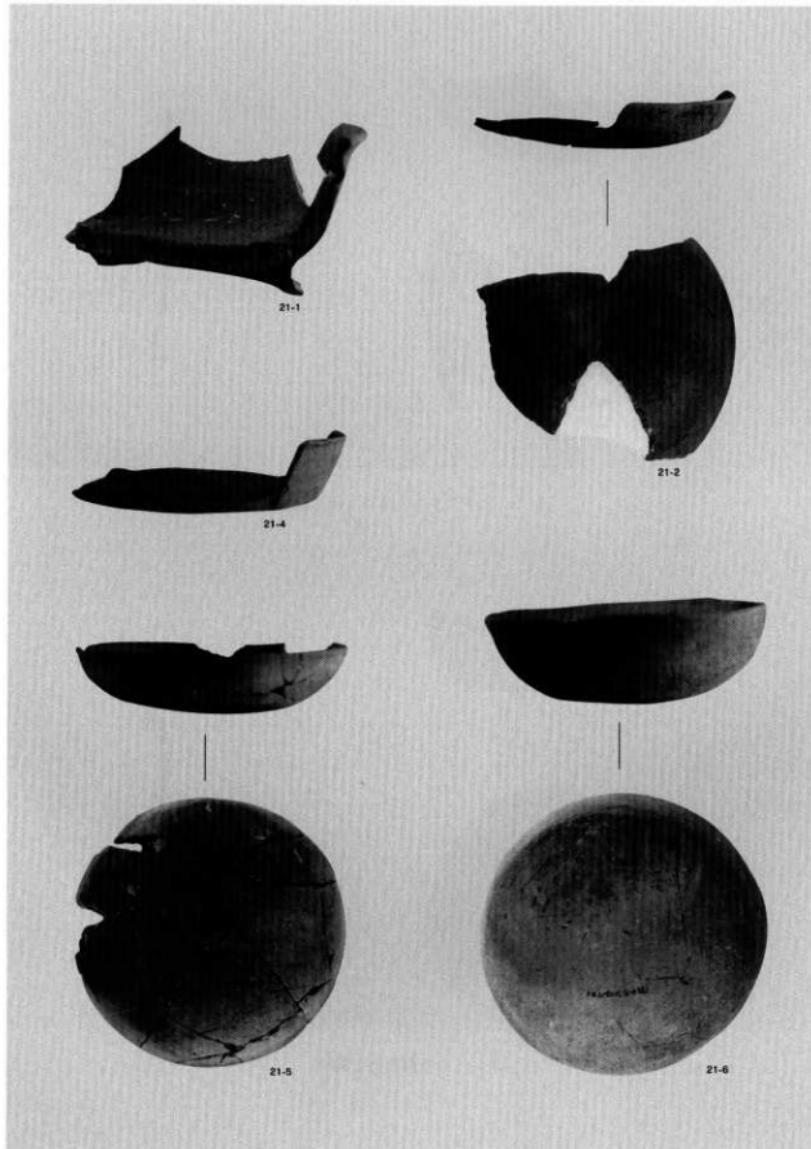
2 3 S I 05 埋土 出土遺物 (1)



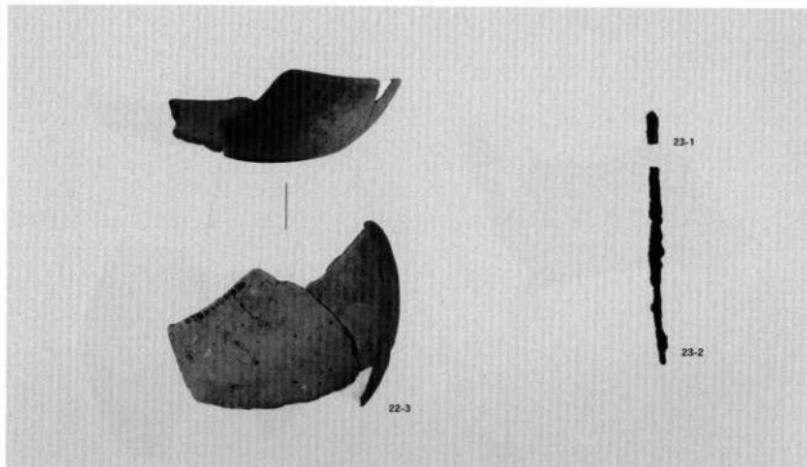
1 3 S I 0 5 墓土 出土遺物 (2)



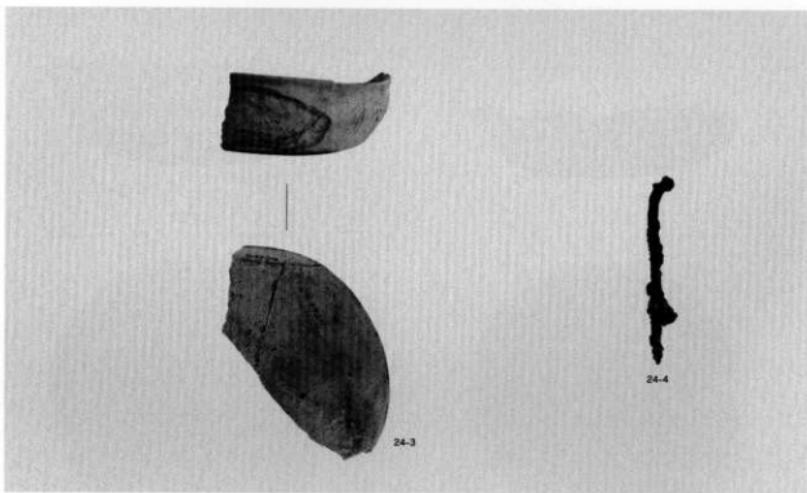
1 3 S I 0 5 床下土壤およびカマド 出土遺物



Pl. 9



1 3 S I 1 5 · 2 0 出土遺物



2 その他の出土遺物

羽犬塚中道遺跡（1）

筑後市文化財調査報告書 第47集

平成15年3月31日

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 (資)四ヶ所印刷

福岡県甘木市大字馬田336

☎0946-22-2369